

藤沢久美

誰がための「投信」



かつて、投資信託の運用会社に入社して「FUND」という言葉に初めて出会ったとき、「投資信託」と「ファンド」という言葉が、どうしてもつながらなかった。なぜなら、ファンドを英和辞典で引くと、「基金」と書かれている。財団などの寄付をイメーシさせる基金という言葉と、投資信託は、どこか違う世

界を感じさせる。

しかし、投資信託について深く理解をしていくと、ファンドという単語に対する違和感は消える。

えていった。不特定多数の人々の少額のお金が集まって、一つの大きな固まりとなり、そのお金を社会的な

活発化する

ミッションを持つところへ投じるという行為は、投資信託も財団の基金も同じであることに気付いたから

金融教育のヒントに

社会変革「ファンド」

だ。大切なのは、同じ志を持った人々のお金が集まることであり、その志を達成することを第一としたプレイヤーがそろっていることだ。

投資信託のリターンは「お金」であるが、財団などの場合は、「ソーシャルリターン」と呼ばれる社会的成果が収益となり、必ずしも直接投資家の手に戻るものではない。しかし、社

会の変革は、回り回ってすべての人に便益を与えるところになる。

こうしたお金のリターンと社会変革の両方を目的に持った投資信託が、「SRI」と呼ばれる社会的責任投資であるが、投資信託の世界以外でも、同様の目的を持ったファンド設立の動きは進んでいる。

市民ファンドと呼ばれるNPOやコミュニティビジネスに融資を行うファンドは、草の根の資金を集めて活動しているし、ブックファンドという本を出版するために、草の根の資金を集めるものもある。例えば、あるブックファンドは、海外の貧しい地域の子供たちを支援するために、

彼らの描いた絵を使った絵本をファンド資金で出版し、その収益を彼らの支援に充てたという。この手のファンドは、図体の大きくなってしまう運用会社には利ザヤが薄過ぎて運用しにくい。小さな規模の企業ならば運用が可能であり、各地で、こうした動きが始まっている。

株や債券に投資をする投資信託への資金流入は鈍化しているが、一方で、活発化している小さな社会変革を目指すファンドの動きは活発化している。ここにこそ、本当に必要な金融経済教育のヒントがあるように思う。

◇